蕉門俳諧集

古典俳文

古典俳文学大系 6

蕉門俳諧集 一

集英社

古典俳文学大系6

蕉門俳諧集一

昭和四十七年一月十日　初版発行
昭和五十一年四月三十日　三版発行

阿部喜三男
校注者　阿部正美
大礒義雄

編集　株式会社創美社
発行者　陶山巌
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ一〇
電話　出版部(〇三)二三〇—六三六一
販売部(〇三)二三〇—六一七一

印刷　大日本印刷株式会社
大文堂印刷株式会社

定価　四九〇〇円

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
著者との了解により検印を廃止いたします。

1392-120006-3041

©1972

目次

解説……三
凡例……三
武蔵曲……一七
虚栗……二五
冬の日……五三
蛙合……五四
春の日……六一
続虚栗……六六
阿羅野……九四
其袋……一三八
いつを昔……一九九
花摘……一九七
ひさご……二三八

俳諧勧進牒……二三四
猿蓑……二六五
北の山……二八九
己が光……二九九
曠野後集……三二四
藤の実……三五〇
市の庵……三六九
俳諧別座鋪……三七五
炭俵……三八七
其便……四一一
笈日記……四四〇
続猿蓑……五〇六
泊船集……五三四
十論為弁抄……五四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

蕉風時代と呼べるものは、俳壇史の事実上では、あるとすればもっと後世であり、少なくとも本集が対象とした時代には、認めがたい。この時代の蕉門俳諧は俳壇中の一部的存在に過ぎなかった。しかし、俳諧史の進展上から見ると、この蕉門俳諧が当時最も意義ある活動をし、特別な注意をひき、史的重要性を担っていたものであった。それで、本集に芭蕉生前の重要と目される蕉門俳書を収録することとしたのである。

貞風における貞徳、談林風における宗因とそれぞれに中心人物があったが、蕉風における芭蕉の中心的存在は、それらにもまさってはるかに重大な存在だった。いわば、蕉風の発生、展開など、おおよそ、すべてが芭蕉個人のそれに先導されて生じ動いたもので、それが蕉門俳諧の一つの特色であった。そして本大系では、この天才的な芭蕉個人の俳諧の動きが『芭蕉集』で、その周辺の蕉門の動きが本集などで見られるわけなのである。

談林風が行き詰ってきたころ、何とかそれを脱出して新風を得ようとした俳人に、談林系の信徳・素堂・来山・言水・才麿・鬼貫らがあり、そうした機運の中に芭蕉とその門流も動いてきた。そして、その動きの中に漢詩漢文調尊重の傾向がことに著しく目立ってき、それが「天和調」または「虚栗調」と呼ばれる、蕉風初期の俳風に及んだ。

『武蔵曲』の編者千春（「センシュン」とよむ説もある）は京都に住んだ貞門・談林系の俳人であるが、これもこの時代の動きに応じた俳人の一人で、江戸へ出て来て、ことに蕉門俳人らと交遊し、新風を試み、天和調・虚栗調の先駆的な調べをかなでたのが本書であった。

※千春は本名大原彦四郎。江戸人ともいうが、京に住み、従兄千之と共に貞門に入り、談林に移り、やがて蕉風に帰した。延宝七年（一六七九）『仮舞台』（江戸八歌仙、巻頭露沾）、天和二年（一六八二）『武蔵曲』を著わす。時代と共によく移った人で、『花見車』は白人に見立てている。生没年未詳。

漢詩文尊重の傾向は無論わが国の文学の伝統中に古くから存したものではあるが、この場合は談林風俳諧の行き詰りを打開するた

めに特に意識されたものであった。従来の俳諧が主として利用した日本古典から異国の中国古典へ目を転じたところに生じた新鮮さもあろう。素材の面で異風な新しいものが目について来たこともあろう。表現（句調）の上で破調・倒語・倒置などをあえてする佶屈調にも新しみを感じたのであろう。

なお、そうした形式面のみならず、この傾向中に知的なはからいが言葉から心の内部へと深まり、その心を露出するために初期では佶屈晦渋とはなったが、従来の卑俗な素材や用語が避けられ、暗く沈んだ色調が現われてきて、談林的な俗臭が少なくなった。また、従来の単純な雅俗の背反関係を利用した滑稽の手段から離れて、自己をながめる自照性が生じて来て、新風の糸口を開き始めた。すなわち、本歌・本説などにとらわれすぎ、それに振り廻されてしまわないような、主体性・独創性を帯びた句作が現われ始めたのである。

芭蕉が『虚栗』の跋で、李白・杜甫を思い、白楽天を慕い、寒山の禅味を求め、西行をたずねて、侘と風雅を言い出しているのは、従来の宗鑑・守武流の継承へ革新的態度を示し、眼を広く和漢の文芸へ向け、さらに処世観に注ぎ、単純な滑稽性・機知・言葉の遊びではない、厳粛・幽玄・侘の新しい俳諧を求める態度を表明したものと言えよう。

これはまた延宝末、天和の交に世相が深刻となり、談林風俳諧の単純な朗笑性を支えていた楽天的・享楽的な現実意識が崩壊し、その現実の苦悩におもてをそむけ、空想の世界を求める浪漫主義が生じてきていた。それが漢詩文調と結びつき、俗界を超脱し、禅に参じ老荘にふけり、自然に遊ぶ脱俗・逸興の色調を強めたとも見られる。ここに滑稽詩としての俳諧は、天和期の重苦しい空の下で、中国の文学と禅的観照とをとり入れることによって、厳粛な人生詩に生まれ変わったのだと見る人もある。

※『虚栗』の編者其角は、宝井氏、もと榎本氏。別号に螺舎・狂而堂・宝晋斎・晋子などがある。江戸の人。延宝初年、十四、五歳で芭蕉門に入り、『虚栗』で蕉風展開上に一期を画し、以後蕉門の筆頭として活躍した。豪放率直な気質で、才知にも恵まれ、新奇壮麗、洒脱巧妙な句風を発揮し、西鶴とも親交があり、のち蕪村らの尊重も受けた。根底には談林的色調を持し、都会的・享楽的・技巧的なものがあり、権門富家にも出入し、その門下の勢力は芭蕉生前から強く、その没後はますます強大となり、晩年はいわゆる洒落風に傾き、江戸座一派の中心人物ともなった。だが、江戸人としての独特な持味をつらぬき、その晦渋難解、技巧的とよく非難される作風にも、根本にはかれらしい純粋・真剣な独自な基調が持続されていた。編著も多く、本集に収めたもののほか、『雑談集』（元禄五年刊）・『句兄弟』（同七年刊）・『枯尾花』（同上）、自選発句集『五元集』（延享四年刊）その他がある。宝永四年（一七〇七）没、四十七歳。

芭蕉に即して言えば、すでに延宝末の深川芭蕉庵入りの頃から、世俗的宗匠の立場をしりぞき、参禅したり老荘をかみしめたりし

て、内面的・精神的なものに沈潜し、俳諧（風雅）一すじに生きようとする、はげしい決意の生活を開始していた。

こうした中から芭蕉がさらに新しく求め出したものが、いわゆる風狂の吟であった。それが果たしてどこまで求め得ようか。その道では冒険ともいえるこの革新の道をかためるべく芭蕉は旅に出た。それが『野ざらし紀行』の旅であり、まず実を結んだのが『冬の日』で、ここに蕉風の第一歩が確立されたと言われている。

芭蕉の旅は自風の宣伝や蕉門結社の拡大ということに重点があったものではなかったが、自然とそうした面へも影響が及ばないものではなかった。『冬の日』を編集した荷兮が引き続いて、『春の日』『阿羅野』、さらに『曠野後集』を出したのは、尾張蕉門の気勢をあげたのであった。これらは必ずしもよく芭蕉の意趣にそうたものではなく、『曠野後集』に至っては反芭蕉的なものさえ含むと言われるが、広い地域に拡がり人数もふえてきた蕉門においては、各地の蕉門がそれぞれに色調を持つようになってきたことは、当然避けられないことであった。そして、この期になると、佶屈な漢詩文調の姿は消え、概して平明な貞享蕉風の句調になっていること、其角の『続虚栗』も同様である。

それに、芭蕉個人の俳風は激しく進歩し変遷したものであったから、それについて行けない門人も多く出ることになり、中には芭蕉と不和のような状態に至った者もあった。荷兮もさらに『ひるねの種』（元禄七年刊）や『橋守』（同十年刊）に至ると、一層、反芭蕉的なものを現わしている。

※『冬の日』の編者荷兮は、山本氏。名古屋の桑名町に住んだ。もと士分、のち医を業とした。はじめ加慶と号して貞門であったが、貞享元年に蕉門に帰した。しかし、晩年はまた蕉風から離れ、連歌方面に進み、昌達と号した。享保元年（一七一六）没、六十九歳だった。

※なお『冬の日』の連衆の野水は、岡田氏、名古屋大和町住。富裕な呉服商で、総町代をつとめ、和歌・茶道をもたしなみ、隠居して転幽と号した。寛保三年（一七四三）没、八十八歳。杜国は坪井氏。名古屋上御園町に住んだ、富裕な米穀商で、町代もつとめた。空米事件で追放され三河保美に隠れ住んだ。芭蕉は特にこの人を愛し、保美の地にこれを見舞い、『笈の小文』の旅にも同伴した。元禄三年（一六九〇）三月、保美で没、享年未詳。重五は加藤氏。名古屋上材木町に住んだ。御目見の家柄で、富裕な材木商であった。享保二年（一七一七）没、六十四歳。羽笠は高橋氏、隠居して熱田中瀬町に住んだ。享保十一年（一七二六）没、八十三歳。『冬の日』の時は荷兮三十七歳、野水二十七歳、杜国二十七、八歳か、重五三十二歳、羽笠四十一歳だった。

この名古屋と同様なことが近江蕉門にも生じている。本集には収載しなかったが、この『野ざらし紀行』の途次で芭蕉との結びつきが出来た、近江蕉門の中心人物尚白は、当時の俳士三百七人、発句約二千五百を含む厖大な『孤松』（貞享四年刊）を出版したが、元

禄五年編の『忘梅』に至ると、すでに芭蕉の新風におくれているところがあり、芭蕉との間に何か悶着もあったらしく、出版に至らず、安永六年（一七七七）になって、ようやく蝶夢により出版されたということがあった。

芭蕉には超俳壇的態度があったが、門人らには蕉門結社の宣揚が求められたことは当然であったろう。『蛙合』は江戸におけるそうした気勢の現われといえよう。すなわち、『野ざらし紀行』の旅を終え、かの冒険を克服し、蕉風の第一歩を確立し、いよいよその安定性を得てきていたころ、「古池や」の吟が蕉門内外の注目をあびた機会をとらえ、仙化のきもいりで出版されたこの書は、まさに蕉門の足なみをかため、その気勢をあげようとしたものであったのであろう。

※『蛙合』の仙化については、別号青蟾堂、江戸の人、蕉門というほか、今のところは詳しいことはわからない。

この頃の芭蕉には『笈の小文』で見られるように、声望高きものがあった。その出発の際の盛大な人々の餞別、旅中では名古屋・鳴海・伊勢・伊賀・湖南、それから岐阜と、諸所において歓迎され、その事実は蕉門の拡大にも及んでいる。しかし、芭蕉個人の態度としては反俗的隠者的な旅の俳人で、風狂、風雅の一すじを求めるのが根本的なもので、相変わらず、超俳壇的であり、自風の宣伝とか蕉門の拡大などには主力が置かれていなかった。

本拠として一番長く腰を落ち着けた江戸においても、こうした旅がちの芭蕉には当然結社の経営とか発展などをはかる余裕はなかったはずである。それに、江戸における芭蕉はいよいよ都心から遠ざかり、深川近辺の友人同志らと風交をするのが主となり、門戸を張るといったような姿勢はますます無くなってきていた。

それで、江戸の蕉門結社としてはすでに主として其角や嵐雪が中心になって、その勢力を根づけ拡げて来ていた。この二人は、

両の手に桃とさくらや草の餅　芭蕉翁（桃の実）

草庵に桃桜あり、門人に其角嵐雪あり

とよまれた重要な門人ではあるが、無論、芭蕉と同調同色ではない。当然なことではあるが、各人に各特色があり、ことに個性の強い其角にはその色が濃く、比較的穏やかといわれる嵐雪にもその特色がある。芭蕉も晩年に至ると、二人の行き方ににがい顔を見せているときがあるが、この二人の手に成る俳書には蕉門俳書として見逃がしがたいものがある。それで、其角については『虚栗』その他を、嵐雪については『其袋』を本集に収載したのである。

※『其袋』の編者嵐雪は、服部氏。名は治助、別号に嵐亭・雪中庵・玄峰堂などがある。生まれは江戸湯島（一説に淡路）。元禄三年頃まで武家奉公をしたらしいが、その後は俳諧宗匠。延宝初年からの蕉門で、其角と並称される古参。其角に比すると、穏健質実で、句風も地味であるが、その門

流も其角系と並んで後々まで続いた。宝永四年（一七〇七）没、五十四歳。編著には『其袋』のほか、『或時集』（元禄七年序）・『芭蕉一周忌』（若菜集とも。同八年刊）・『杜撰集』（同十四年刊）その他がある。

元禄二年（一六八九）には芭蕉はかの『おくのほそ道』の旅をしたが、その同伴者になれなかった路通が、のちその跡を慕い、また諸地方を旅行して、その際得たものの成果を一書にしたのが『俳諧勧進牒』であった。

※路通は八十村氏。姓は斎部または忌部。出身地は美濃（岐阜県）か（京都また筑紫説もある）。いつの頃からか、漂泊の僧として乞食生活をし、貞享二年（一六八五）頃蕉門に入った。元禄元年、二年頃は芭蕉に親近したが、三年以後は疎遠になった。奇行多く、同門の非難をあびたり、還俗のことで芭蕉の不評を受けたりしたが、作には独自の風味があり、芭蕉もその才を認めていた。元文三年（一七三八）没、九十歳。

去来が説くところ（『去来抄』）によると、――奥の細道の旅の後で蕉門の俳諧が一変した。この旅中ではまだ、たとえば「あなむざんやな甲の下のきりぐ〜す」といったような奇調句があったが、後に「あな」の二字を捨てられた。その他にも奇調の句があったのをはぶき捨てられたものが多い。そして、この年の冬にはじめて不易流行を説き始められた――とある。また、「さび」「しをり」もこの旅中に考えられ、虚実説もこの間に成長したものと見るのが通説で、なお去来によれば――そうした芭蕉を幻住庵や落柿舎に迎えて指導を求め、苦心して編集したのが『猿蓑』だった――と言う。

『ひさご』は『冬の日』にならって、歌仙五巻のみを収めたといわれているが、『猿蓑』の前奏曲として、その意義が認められている。

※『ひさご』の編者珍碩は、珍夕とも書き、後には洒堂と号した。近江膳所の人、医を業として道夕と号したという。俳諧はまず尚白につき、元禄二年ごろ蕉門に入った。翌三年幻住庵に入った芭蕉に親しみ、よく指導を得て『ひさご』の編を成した。芭蕉に「洒落堂の記」がある。元禄五年には江戸に下り、芭蕉庵で越年して『深川集』の編があった。同六年大阪市中に移り、七年『市の庵』を編した。しかし、土地の之道（諷竹）との間が円満を欠いたので、芭蕉は両者の斡旋に乗り込み、ついにそこで客死するに至ったが、どうしたゆえか、当時の芭蕉追善の席にかれの名は見えない。元禄十二年ごろ膳所に帰り、十五年正秀と『白馬』を共編したが、すでに俳家としての活力は衰えていた。元文二年（一七三七）没、七、八十歳か。

『猿蓑』に至っては、現代の研究者間にも普通、――芭蕉関係中では最円熟期を代表する、したがって古今俳書中の最傑作――とか、――「さび」「しをり」「にほひ」「うつり」を十分発揮した蕉門随一の代表撰集――とかされている。『俳諧大辞典』を見ても――蕉門作者の最盛期とすべき折の、大規模な蕉門全般の鳥瞰図たるべき集。その発句は概ね幽寂・重厚・清雅の趣を帯び、連句もまたは

じめの三巻のごとき、ことに香気高く、蕉風匂い付の粋とすべきものがあった。本書はやはり俳諧史上随一の聖典であった――などとある。

だが、この『猿蓑』にも編者去来・凡兆を中心とする関西蕉門グループの色調が特に考えられることはやむを得まい。たとえば、江戸蕉門グループなどはこれをどう受けとったであろうか。また、この集が蕉風俳諧の最高の境地を極めているとも言えない。なぜなら、芭蕉にはこの集の後に、個人作ながらまた異色ある『おくのほそ道』があり、さらにいわゆる「軽み」の新風を説いたからである。

※去来は向井氏、通称喜平次または平次郎。諱は兼時。長崎の医家に生まれ、幼時一家とともに京都に移住した。各種の武芸・学問を修め、延宝の頃弓矢を捨て、有職・天文・暦数等の学をもって堂上家に仕え、親王・摂政の館へも伺候した。芭蕉に入門したのは貞享初年。高潔篤実な人で、芭蕉はじめ同門の尊信を受け、別墅嵯峨の落柿舎には芭蕉もよく来訪した。元禄三、四年特に芭蕉に親近し、凡兆と二人で『猿蓑』を編集したことは殊に生涯の大事であった。宝永元年（一七〇四）没、五十歳。遺著になお『旅寝論』（元禄十二年稿）・『去来抄』（宝永元年成）などがある。

※凡兆は野沢氏。元禄三年はじめ頃まで加生と号しており、改号したもの。晩年は阿圭と号した。加賀金沢の人、京都に出て医を業とした。『阿羅野』に既に句が見えるが、芭蕉と顔を合わせたのは元禄二年冬か三年の夏であろう。『猿蓑』では去来と共に選者となり、また最も多数の入句者となり、一躍世の注意をあびた。その後、罪に坐して入牢。のち許されて俳諧にも復帰したが、従前の精彩はなかった。正徳四年（一七一四）没、享年未詳。結局、『猿蓑』において特に偉才を発揮すべく生まれて来たような人であった。

さて、こうした史的展開の過程に幾多の蕉門俳人が成長し、注意すべき蕉門俳書も多く出版されるようになった。その中、本集は次のものを収載した。

『北の山』は、奥の細道の旅中金沢で芭蕉に接した句空が、そのあとを慕い、幻住庵に芭蕉をたずねた。その折蕉門諸家にも接したが、その時得た材料に基づいて編集したもの。

※句空は加賀金沢の俳人。柳陰庵・柳陰軒などとも号す。もと町家の出であるが、貞享末年京都知恩教寺で剃髪、以後卯辰山金剛寺の傍にかくれ住んだ。元禄二年秋芭蕉入門。『北の山』その他の編著をなし、北越蕉門中の重要人物であった。生没年未詳。ただし正徳二年刊『布ゆかた』に当時六十五、六歳で生存中の旨が見える。

『己が光』は車庸が之道を誘って勢田・石山辺の螢見物に出かけた時の吟を中心に、膳所やその他の地方の作家の発句を編集したもので、当時の蕉門俳諧の一斑をよくうかがわせる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

※車庸は車要とも書く。塩江（潮江）氏。松濤軒の号もある。大阪の人。之道と親しく、その手引きで元禄四年秋、湖南滞在中の芭蕉に入門したらしい。同五年『己が光』、同十五年『松のなみ』を編した。資産に恵まれた商家だったらしく、芭蕉書簡に見える、大阪の酒屋、伊丹屋長兵衛と同一人かといわれている。生没年未詳。

『藤の実』は芭蕉をはじめ蕉門諸家の作を集め編集したものだが、去来（『去来抄』）や許六（『俳諧問答』）が推賞した、当時の蕉門俳諧をうかがわせる佳書である。

※素牛はのち惟然・鳥落人などとも号した。美濃（岐阜県）関の人。元禄元年六月大垣で芭蕉に入門、同三年以後の芭蕉上方滞在中は随従することが多かった。五年頃から一時京都に住み、七年には『藤の実』を著わした。元来瓢逸無頓着で奇行に富み、風狂の中に一生を過ごした人だが、芭蕉没後も無論放浪の俳人だった。しかし、丈草や鬼貫らとは親交があり、播州（兵庫県）地方にはかなり門人も出来た。句は軽妙洒脱、口語調や無季の句もよむに至っている。正徳元年（一七一一）没、六十余歳。

『市の庵』は洒堂が膳所から大阪の市中に移り住んだ時の記念集で、武江・膳所・京・阪の諸家の発句や連句を載せ、小冊子ながら、当時の蕉門俳諧の一斑をよくうかがわせる。

『別座鋪』は、元禄七年上方に向かった（最後の旅になる）芭蕉をまじえて編者子珊・杉風らが巻いた餞別歌仙を巻頭にして、その他その時の諸家の餞別吟を編集しているが、「軽み」があらわれてくる書として特に注目されている。

※編者の子珊は江戸の人、元禄十二年（一六九九）没。姓氏享年共に未詳。芭蕉晩年の門人で元禄五年成立の『三日月日記』に初見。杉風と特に親しく、晩年の芭蕉を親しくかこんだ深川グループの一人で、資産豊かな人であったらしい。『別座鋪』のほか『続別座敷』（元禄十三年刊）の編著もある。

『炭俵』は蕉風三変論の後期を代表するものとして、すでに去来・許六らの直門に称揚され来たったもので、いわゆる晩年の風調「かるみ」をよく表わしているものとされ、七部集の一つにも数えられている。編者は野坡・孤屋・利牛の三人である。

※志太野坡は越前福井の人。商家に生まれ、幼時一家と共に江戸に出、のち三井越後屋の番頭となる。はじめ野馬と号して貞享四、五年度に句作が見え、その後約五年間中絶して、元禄六年再び俳壇に復帰し、七年『炭俵』を編集して声名を確保した。芭蕉没後は中国・九州辺を巡遊し、のち大阪にとどまり、西国地方に巨大な勢力を築いた。ただし、晩年になるほど句風は低俗かつ知的となった。元文五年（一七四〇）没、七十八歳だった。

※小泉孤屋は通称小兵衛、江戸の人。これも越後屋の手代だった。蕉門としては『蛙合』ころから作が見えるが、『炭俵』の編者の一人となり、特に注目を引いている。その他はよくわからず、享没年も未詳。

※池田利牛も江戸の人、通称利兵衛または十右衛門、この人も越後屋の手代だった。俳人として『炭俵』の編者に加わったことで世に知られているが、その他はわからず、生没年も未詳。

『其便』は編者泥足（でいそく）が江戸へ帰郷した際の記念編集の書で、江戸・長崎の作家を主とし、他門の作も見える。また、たまたまその途次大阪で得た芭蕉をまじえた歌仙一巻は、芭蕉生前の最後のものとなった。

※泥足は和田氏、別号に酔翁亭。明暦元年（一六五五）生まれか。江戸の人、蕉門。長崎勤務の江戸会所商人だったが、のちは京都に住んだ。没年未詳。

『笈日記』は芭蕉没後、ただちに支考（しこう）が師の足跡を印した地方を巡遊し、その遺吟・遺文などを集め、諸家の追悼句を載せ、岐阜の落梧の遺稿『瓜畠集』も採録している。資料としての価値も多く、ことに難波部の前後日記は芭蕉終焉の様子を描いて、其角の『枯尾花』、路通の『芭蕉翁行状記』と並んで、貴重な文献となっている。

※各務（かがみ）支考は別号に東華坊・野盤子・獅子庵などがあり、変名に蓮二房・白狂などがある。美濃の人で、元禄三年ごろ蕉門に入り、芭蕉に親近した。芭蕉没後はいわゆる美濃派を起こして普及に努めたが、句風は低俗に傾いた。正徳元年（一七一一）みずから死亡と称し、のちは門人として変名で活動した。享保十六年（一七三一）没、六十七歳。編著ははなはだ多く、『笈日記』のほか、『葛の松原』（元禄五年刊）・『続五論』（同十二年刊）・『東西夜話』（同十五年刊）・『本朝文鑑』（享保三年刊）・『俳諧十論』（同四年刊）・『十論為弁抄』（同十年刊）・『和漢文操』（同十二年刊）・『俳諧古今抄』（同十五年刊）などがあり、句作・指導のみならず、俳論・俳文にもよく筆を振るった。

『続猿蓑』は、支考に言わせると、沾圃（せんぽ）が予選し、それを元禄七年に芭蕉と支考が伊賀で再検討をして成立したものだとする。蕉門間にはそれに疑義をはさみ、越人のごとく支考偽撰説をなすものがある。しかし、九月十日付去来宛芭蕉書簡や許六説によると、芭蕉が後見したことは疑う余地がない。ただ出版されたのが没後五年のことであり、板元の奥書にやや弁解めいた余意が感ぜられ、支考が手を加えているらしい様子は払拭しきれない。だが、去来・風国・許六らはこれを新風の代表的なものとして「かるみ」がよく表われているものと称揚しており、七部集の一つにも加えられている。

※沾圃は江戸の人、宝生九郎暢栄（のぶひで）。宝生流第十世の能役者で、はじめ越前家に抱えられ、のち幕府に仕えた。俳諧は蕉門で、はじめ雨言・幾寿斎と号したが、母が野々口立圃の縁者だったので、元禄六年春、芭蕉の後見で二世立圃を名乗った。『続猿蓑』の発議者とされる。生没年未詳。

『泊船集』はその大部分が芭蕉遺稿集である。これがその最初期のもので、いわば芭蕉発句集の先鞭をつけたような部分があり、意義は軽いものではないが、誤謬もまた多く含み、その点でだいぶ値打を下げている。

※『泊船集』の編者風国は伊藤玄恕という京都の医家で、父が去来の兄向井元端と親しかったらしい。編著としては他に『初蟬』（元禄九年）『菊の香』（同十年）等がある。

以上が、蕉風・蕉門俳諧の初発期から「かるみ」が提唱された芭蕉晩年に至るまでの、重要俳書として本集に収載されたものとその編集者に関する簡略な解説である。

くり返すようではあるが、当時の俳壇全般を考慮すべく、たとえば、元禄五年刊の阿誰軒編『俳諧書籍目録』を見ると、この書に収録されている蕉門俳書の数は他門に比して、元禄四年が四十六対五、五年が五十対四の比率しか見出せない。なお、同四年刊の『元禄百人一句』では、百人の中で蕉門は二十人。また轍士の『花見車』（同十五年刊）の中で、太夫に擬せられている俳諧師三十一人のうち、蕉門は六人といったような状態で、当時の俳壇における蕉門の実際勢力は少数派に過ぎなかったことが察せられる。しかし、俳文学史の考察の上からいえば、これらの蕉門俳書がはなはだ重要なものであることは、すでに述べたごとくである。

なお、本書には余白があったので、「蕉門俳論俳文集」中に予定しておいた『十論為弁抄』を付載した。

（阿部喜三男）

凡例

一、本書は「蕉門俳諧集　一」として、主に芭蕉生前の、蕉風展開史上重要と目される俳書を集め、なお外に支考の俳論書『十論為弁抄』を附載した。

二、翻刻に当たっては原本の体裁を保存することを旨とし、用字・仮名づかい等はすべて原本のままとした。但し繙読の便を考慮して、適宜句読点・濁点を施し、会話・引用文には「　」を、書名には『　』を加えた。底本の脱字は〔　〕に入れて補い、衍字は（　）でかこんで、右側に衍と記した。原本の仮名書きのうち、「ニ」「ハ」「ミ」は平仮名に統一して、敢えて区別しなかった。

三、原本にある濁点には右側に（濁ママ）と記し（濁点が二字続く場合は（濁二ママ）とする）、原本にある振り仮名の濁点には右側に・印を附して、校注者の附した濁点と区別した。

四、できるだけ多く振り仮名をつけ、原本の送り仮名の不足も、これによって補うようにした。原本にもとからある振り仮名は＜＞に入れて区別した。原本の誤字や仮名ちがいは、右側に（　）に入れて正しい用字を記した。原本の振り仮名の仮名ちがいも原則として右側に（　）に入れて示すこと同様であるが、『虚栗』『別座鋪』『藤の実』等の如く、誤記の指摘を注にまわした場合もある。校注者の附した振り仮名も含めて、これらの基準はすべて歴史的仮名づかい及び字音仮名づかいに従う。

五、原本の仮名書きには、右側にそれに相当する漢字を宛て、意味の把捉に資するように努めた。

六、漢字は原則として現時通用の字体にしたが、一部の異体字はこれを存して、原本のおもかげを伝えるよすがとした。涼（涼）・灵（霊）・逃（逃）・躰（体）・菴（庵）・貝（貌）・脉（脈）・帋（紙）・帒（袋）・孖（州）・艸（草）・鴈、厂（雁）・穐（秋）等の類である。

七、漢文は原本にあるもの以外は原則として返り点、送り仮名をつけず、おおむね読み下しのルビをつけた。漢文の振り仮名には＜＞を省略した。

八、芭蕉の文章及び一座した連句はすべて『芭蕉集』に譲り、該当箇所にその旨を記して省略した。

九、各書の底本その他書誌的な事項は、それぞれの初めに簡略に記して解題とした。末尾の署名がその書の校注者である。

一〇、注は地名・人名・語句の出典・難語等を主とし、本文右肩に算用数字を附して標出し、おおむね各書末尾にまとめてかかげた。

一一、本集のうち、阿部正美の担当した書目は、当初尾形仂氏が担当される予定だったものであるが、同氏の御都合により阿部が引き継ぐことになった。資料の閲覧等について、尾形氏の御好意にあずかったことをここに記して深謝の意を表する。

一二、所収書目の翻刻に当り、資料の使用を許された図書館・研究室、並びに口絵資料を提供された天理図書館と大津市の村田利兵衛氏にも、厚く御礼申上げたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com